

Top of the world

R2-1 All Japan road race championship
Feel the real excitement of motorsports!

Aoyama HIROSHI
2003 GP250 Champion

Kitagawa KEIICHI
2003 JSB1000 Champion

Konishi YOSHITERU
2003 ST600 Champion

Aoyama SHUHEI
2003 GP125 Champion

2004

R2-1 GENERAL INFORMATION

R2-1 MFJ 全日本ロードレース選手権シリーズ



All Japan Road Race Championship

2004

R2-1 MFJ All Japan Road Race Championship

R2-1 総合インフォメーション

CONTENTS

- MFJ R2-1 All Japan Road Race Championship
Top of the World 2004 R2-1P-02
- 01 What's R2-1 All Japan Road Race Championship
R2-1 って一体何だろう?P-03
- 02 R2-1 The Race
R2-1 レースとシリーズP-05
- 03 2004 R2-1 Race Schedule
2004 レーススケジュールP-07
- 04 Classes and Machines
R2-1 開催クラスとマシン規定
JSB1000P-08
ST600、GP125、GP250P-09
- 05 R2-1 Riders
R2-1 ライダー
1.JSB1000、ST600P-10
2.GP125、GP250P-11
- 06 R2-1 Entry Lists
R2-1 主要年間エントリーリスト
1.JSB1000P-12
2.ST600P-13
3.GP1250P-14
4.GP250P-15
- 07 R2-1 Spectators
2003年観客動員数と参加台数P-16
- 08 Activities of R2-1 Promotions
R2-1 プロモーション
プロモーション展開.1/2004 プロモーションP-17
プロモーション展開.2/TV放映(CS放送)P-18
プロモーション展開.3/ブロードバンド動画配信P-19
プロモーション展開.4/地域プロモーションP-20
プロモーション展開.5/MFJ&R2-1 ウェブサイト 他P-21
プロモーション展開.6/公式ファンクラブCLUB R2-1P-22



Top of the world

*R2-1 All Japan road race championship
Feel the real excitement of motorsports!*

2輪がイチバン、ロードレースがイチバンを標榜する、「R2-1 MFJ 全日本ロードレース選手権シリーズ」は、国内最高峰のモーターサイクルロードレースとして直実にその地歩を確立してきた。

そして、2004年のR2-1 MFJ 全日本ロードレース選手権シリーズは、さらに発展する。

メインカテゴリーの「JSB1000」クラスは、イコールコンディションを図り、分かりやすくローコストで参加者の立場に立ったレギュレーションを採用した日本独自のカテゴリーだ。

多くのチームに勝利の機会があり、ライダーの技量とチームの総合力がクローズアップされる接戦が予想される。特に今年はベースマシンのモデルチェンジが多く、各メーカーとも新型車両が投入され、どのチームあるいはライダーがウィナーになるのか、予想のつかない展開となるだろう。

2001年に初めて全日本選手権として開催された「ST600」クラスは4年目を迎え、ローコスト&イコールコンディションのコンセプトが支持されて参加台数が大きく増加。さらに激しいレース展開が見込まれる。

そして世界選手権MotoGPに直結するのが、

2サイクル・レーシングマシンでの高レベルな接戦が展開される「GP125」「GP250」クラスだ。

昨年、この両クラスに加えST600クラスをも制して3冠を達成した「Team・HARC-PRO.」。

チャンピオンチームを誰がどうやって攻略するのか、大きな注目を集めるだろう。

これら4つの個性的なクラスのマシンとライダーがそれぞれ激しいバトル、白熱したレースを日本各地のサーキットで繰り広げるだろう。

2004年、R2-1 MFJ 全日本ロードレース選手権シリーズは戦国時代に突入したと言える。



01 | What's R²-1 MFJ All Japan Road Race Championship R²-1 って一体何だろう？

国内最高峰のモーターサイクルロードレース

MFJ 全日本ロードレース選手権は、モータリゼーションの黎明期、1967年から始まった日本唯一のモーターサイクルロードレースの日本最高峰レースである。

ロードレースは排気量毎にクラスが分かれるが、その間、幾多の変遷の後、1994年には一般市販マシンをベースとしたスーパーバイク(略称：SB)クラスを最高峰に、2ストローク専用マシンを使用するGP250、GP125の3クラスが開催されてきた。その後、1999年にはSBクラスにスーパーNK(略称：S-NK)規定のマシン混走が認められ、レース名称に“2輪がイチバン・ロードレースがイチバン”の意味を込めた“R²-1”を加え、[R²-1 MFJ 全日本ロードレース選手権]と改称。さらに2001年からほぼ無改造の一般市販ストックバイクを使ったST600クラスが、新クラスとして開催されるという道のりを辿ってきた。

2002年は、世界的な大きな変化の流れの中で、SBクラスに日本独自のジャパン・スーパーバイク1000(略称：JSB1000)、世界選手権MotoGPのマシン(990cc/4ストローク)も走ることができるプロトタイプという2つの新たな規定のマシンが混走出来ることになり、SBクラスは都合4クラス(SB/JSB1000/S-NK/プロトタイプ)のそれぞれ個性的なマシンが混走するという、大きな構造改革を受けた。さらに、2001年は暫定的な開催だったST600クラスが、参加者の増加を受けてシリーズ全戦で行なわれることとなり、2002年のR²-1 MFJ 全日本ロードレース選手権は、SB(SB/JSB1000/S-NK/プロトタイプ)、GP250、GP125、ST600の4クラスが開催されてきた。

そして2003年は、メインカテゴリーをJSB1000として進化し(SB/S-NKクラスも混走)、4クラスで激しいバトルが繰り広げられてきたのだ。



名実共に日本最高峰カテゴリーとなったJSB1000

新時代のメインカテゴリーとなったJSB1000

2004年は、いよいよ全日本選手権最高峰クラスがJSB1000のみに一本化され、メインカテゴリーとしてスタートする。このJSB1000は、イコールコンディション、もっとローコスト、さらに参加しやすく、を目的に作られたカテゴリーで、FIMスーパーバイク世界選手権やアメリカのAMAスーパーバイク、イギリスのBSB(ブリティッシュスーパーバイク)など、世界的な1,000ccへの流れを日本独自にアレンジしたものだ。

JSB1000は、1,000ccまでの一般生産市販車をベースマシンとし、改造範囲は極めて狭く、一部でパーツ単位の買い取り制度を設けたことで、イコールコンディションとローコストを実現している。さらに、国内4メーカーだけではなく、海外のメーカーもベースマシンを販売していることから、マシン選択の幅も広がり、参加しやすくなっているというわけだ。

そして大きな変化は、このクラスへのメーカーの関わり方である。今までのファクトリーチーム参戦ではなく、ユーザー・コンストラクターをサポートする体制にシフトしたのだ。日本のロードレース人気を支えた各



2004年のJSB1000は、今まで以上にハイレベルな接戦を予感させる

メーカーの熾烈な争いがなくなることは、エンターテイメントとしてのモーターサイクルロードレースに大きな影響を及ぼすと考えられた。しかし、実際には各有力コンストラクターやチューニングショップなどがそれぞれ得意とするメーカーのマシンを独自チューニングした個性的なマシンが多く登場し、またチームやライダーも大挙参加することで、一躍JSBクラスはこれまで以上に接戦の期待できるクラスへの進化したのだ。

この進化は、誰もが上位入賞の機会を得るだけではなく、ライダーにとっては走る機会、有力コンストラクターやチューニングショップにとってはユーザー層を広げることになり、ロードレース界全体の活性化にも繋がると期待されている。



ST600、GP125、GP250。個性的なクラスたち

新時代のメインカテゴリーとなったJSB1000の直下に位置するのが、ST600クラス。JSB1000より一足先にR²-1で開催されていたこのクラスは、600ccの一般生産市販車両を使うこと、各メーカーがベースマシンを発売していること、改造範囲が極めて狭いこと(JSB1000よりも狭い)、買い取り制度やレースでのタイヤ本数制限があることなど、JSB1000と近い考え方だが、よりローコスト&イコールコンディションを追及している。ST=ストックとは、ほぼ無改造の市販状態という意味で、ベースマシンの戦闘力がそのままレースでの優劣につながってくることも多いが、その勝敗はライダー同士の技量によるところが大きい。それだけに、見ていても激しいバトルの連続となる。

一方、GPカテゴリーは、レース専用生産された車両を使用するクラスで、R²-1ではGP125(125cc・単気筒)とGP250(250cc・2気筒)の2クラスが開催されている。このカテゴリーは世界最高峰のMotoGPクラス(990cc・4ストローク)と共に、世界選手権が開催されており、言わば世界に直結するクラスと言えよう。これまでも多くの日本人選手が世界選手権に挑戦しており、125ccと250ccでは世界チャンピオンも誕生しているほど、日本人ライダーのレベルは高い。純レーシングマシンによるハイレベルな争いが展開されるのが、このGP125とGP250クラスだ。



2003年R²-1 ST600クラス



2003年R²-1 GP125クラス



2003年R²-1 GP250クラス

ますます大きくなるR²-1の魅力とは?

ロードレースの日本最高峰、R²-1の魅力は、何と云ってもレースでの接近戦バトルだろう。4輪のモータースポーツでは抜きどころがない場合でも、バイクは接近戦の中でパッシングシーンを見せる。しかも、JSB1000、ST600、GP125、GP250という4つの個性的なクラスで、極めて不安定なバイクという乗り物を操るライダーのバランス感覚とテクニックに裏づけされたハイレベルなバトルは、R²-1ならではのものだ。これこそがR²-1の持つ最大の魅力と言えるだろう。

ロードレースに潜む凄みは、言葉では語れない。是非その目で確かめてほしい。



02 | R2-1 The Race R2-1 レースとシリーズ

2004年 R2-1 MFJ 全日本ロードレース選手権シリーズ

R2-1 MFJ 全日本ロードレース選手権は、JSB1000、ST600、GP125、GP250の4クラスが同日開催(第1戦鈴鹿2&4を除く)され、国内最高峰の全日本選手権をかけて国内各地を転戦して行なわれるシリーズ戦である。

2004年はシリーズとして全7大会が開催を予定しており、JSB1000が全7戦、ST600、GP125、GP250は全6戦で年間チャンピオンを狙って開催される(シリーズレーススケジュールは07ページ参照)

各大会では、土曜日に決勝レースのグリッド順を決める公式予選のタイムアタック、日曜日に決勝レースが行われる。各ライダーには、決勝レースの結果に応じて下記のポイントが与えられ、その総合得点で年間シリーズチャンピオンが決定される。2004年はシリーズ戦数が6~7戦となっており、一つでも取りこぼしがあればチャンピオンは取れない可能性が高い。それだけに、より接戦でのチャンピオン争いが展開されるだろう。



2003年JSB1000クラス総合チャンピオン
北川圭一

■2004年の全日本選手権ポイントシステム

順位	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	10位	11位	12位	13位	14位	15位
ポイント	20	17	15	13	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1

2004年のポイントシステムは、上記のポイントが各レースでの優勝~15位までのライダーに与えられる。また、ST600クラスは全6戦のうち4戦の有効ポイント制となる。さらに、年間で出場登録しているチーム(年間登録チーム)を対象としたチームポイント制も採用しており、各クラスでそのチームが起用するライダーの中で一番良いポイントだけを抽出して積算し、チーム年間ランキングも決定している。

JSB年間チャンピオンに文部科学大臣杯を授与

2002年度、モーターサイクルロードレースでは初めて、全日本選手権シリーズスーパーバイククラス(SB/JSB1000/S-NK/プロトタイプ)の年間チャンピオンに対し、文部科学省より「文部科学大臣杯」が授与されることになり、栄えある初の受賞者は、渡辺篤(チーム スズキ)となった。また、2003年全日本ロードレース選手権JSB1000クラスは北川圭一(ケンツィトラス トモジョ ウエスト)が受賞した。

これは、所管省庁である文部科学省に大会の後援及び文部科学大臣杯授与の申請を行った結果、国内モーターサイクルロードレースの頂点である「全日本ロードレース選手権」は過去40年の歴史ある競技会であり、国内の普及振興に大きく貢献していることが評価されたことによる。

そして、2004年も「文部科学大臣杯」の授与が決定しているが、今年は全日本選手権シリーズJSB1000クラスのチャンピオンがその対象となる。

「文部科学大臣杯」のかかった2004年度全日本選手権シリーズJSB1000クラスは、第1戦鈴鹿大会(2&4レース・三重県)を皮切りに、最終戦TI大会(岡山県)まで全7戦で争われる。

文部科学大臣杯とは…

文部科学省は、日本国内におけるスポーツの普及・振興を目的に、全国規模で行われる各種スポーツ大会を後援している。それら後援スポーツ大会のなかで、特に優秀な成績を修めた選手に文部科学大臣から贈られるのが文部科学大臣杯。



R2-1のレースについて

R2-1は、レギュレーション(レース規則)によりレースの総走行距離130km以下と規定されるスプリントレース。決勝レースでは、予選順位に基づいて決められるスターティンググリッドでエンジンをかけて静止した状態からスタート(クラッチスタート)し、決められた距離を最も早く走り切った者が優勝となる。

なお、レース距離は全クラスとも60km～130kmと規定され、参加資格者は、MFJ国際ライセンスを所持している者なら自由にエントリーできる「フリーエントリー制」となっている。

決勝レースへの出走台数は各サーキットやクラスによって異なるが、概ね最大40台前後がスタートのシグナルに従って一斉にスタート、クラスによってはトップ争いの集団が10台以上に膨れ上がることもあり、4輪レースとはまったく違ったモーターサイクルレースならではの激しい接近戦が最大の魅力だ。

各大会では、金曜日が非公式の練習走行(A.R.T.走行)日、土曜日に午前・午後の2回の公式予選(タイムアタック)が行われ、その結果によりタイム順に決勝レースのスターティンググリッドが決定される。そして日曜日には4クラスの決勝レースが行われるわけだ。2004年はST600、GP125、JSB1000、GP250という順番で決勝レースが開催されることになった。

決勝レースは、

- 1)ピットガレージからコースイン(サイティングラップ)
- 2)スターティンググリッドに整列～選手紹介など
- 3)ウォームアップラップ(開始1分前にエンジンスタート)
- 4)再度スターティンググリッドに全車整列
- 5)レッドシグナル消灯でスタート

という流れで開始される。ウォームアップラップを終了した時点でトラブルなどでグリッドに着けなかったライダーは、ピットインしてピットスタートあるいはセーフティカーの後方よりスタートすることもできる。ただし、その場合は全車スタートした後のスタートとなり、大きなハンディを背負うことになる。また、レースの安全性を考慮した規則として、大会期間中を通じてのピットロードのスピード制限も設けられており、2004年からは60km/hと一層厳しくなった。スピード制限に対する決勝レース時(サイティングラップ開始以降)の違反については、ストップ&ゴーのペナルティが課せられる。

なお、各クラスともゼッケンナンバーは、原則として前年度全日本選手権のポイント獲得者で、当該クラスのランキング順位に従って年間指定ゼッケンナンバーが与えられる。前年度チャンピオン(ランキング1位)は、栄光のゼッケン“1”を付けて走ることになるわけだ。年間で出場するライダーで新たにそのクラスに参戦する場合やクラスを転向した場合には、指定されているゼッケン以外で任意の番号を選ぶことになる。また、条件が整えば、指定ゼッケン以外の番号を選ぶことも可能である。





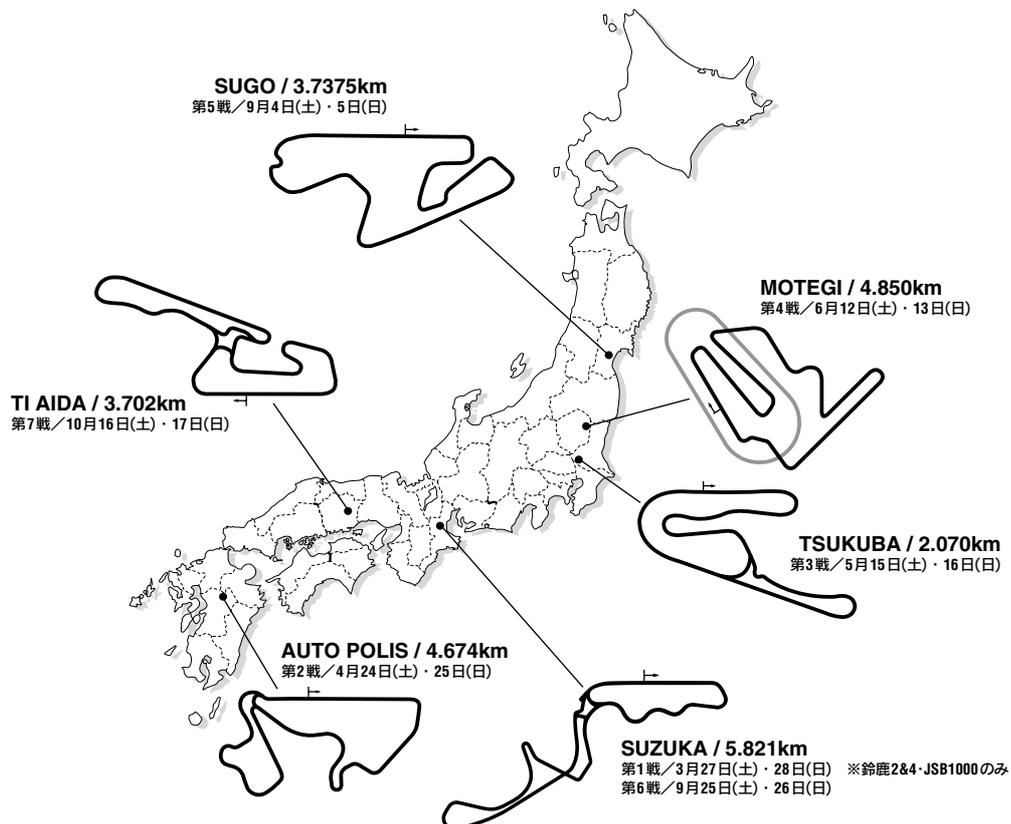
03 | 2004 R²-1 Race Schedule 2004 レーススケジュール

2004年選手権シリーズは全7大会が国内各地で開催

2004年のR²-1 MFJ 全日本ロードレース選手権は、下記の全国各地6箇所のサーキットを転戦してシリーズ全7大会が行なわれる。

大会の中には特徴的なものもあり、第1戦の鈴鹿大会は、伝統の2&4レースとして、JSB1000クラスのみが、4輪の国内最高峰レースであるフォーミュラ・ニッポンと併催される。そしていよいよ4月下旬の第2戦オートポリス大会以降からは4クラスが揃っての開催となり、第7戦TI大会まで行われる。いずれも2日間の日程で、土曜日が公式予選、日曜日は決勝レースが開催される。

開催日	大会	開催場所	開催クラス			
3/27-28	第1戦	鈴鹿サーキット(2&4)	JSB1000	-	-	-
4/24-25	第2戦	オートポリス	JSB1000	GP250	GP125	ST600
5/15-16	第3戦	筑波サーキット	JSB1000	GP250	GP125	ST600
6/12-13	第4戦	ツインリンクもてぎ	JSB1000	GP250	GP125	ST600
9/4-5	第5戦	スポーツランドSUGO	JSB1000	GP250	GP125	ST600
9/25-26	第6戦	鈴鹿サーキット	JSB1000	GP250	GP125	ST600
10/16-17	第7戦	TIサーキット	JSB1000	GP250	GP125	ST600
		開催戦数	7戦	6戦	6戦	6戦





04 | Classes and Machines R2-1 開催クラスとマシン規定

最高峰JSB1000クラスは国内外メーカーがひしめき合う激戦区

R2-1 MFJ 全日本ロードレース選手権の最高峰クラスJSB1000。国内4メーカーの市販ベース車両が揃い、有力コンストラクターやショップチームによる個性的なマシンが出揃った。2004年は新型モデルも登場して、競争は一層激化するだろう。国内4メーカー以外にもDUCATIが参加する。

Honda CBR1000RR



Honda CBR1000RR

JSB1000クラスのマシンは、一般生産型モーターサイクルで、排気量が600cc～1000cc、2気筒以上の4ストローク車両。

2002年の初代JSBチャンピオン山口辰也が駆ったのが、Honda CBR954RR。ホンダの誇るピュアスポーツモデルだ。2003年はスズキGSX-R1000の後塵を拝したが、2004年からは待望のニューモデル「CBR1000RR」が登場する。MotoGPで圧倒的な強さを見せるRC211Vのテクノロジーを受け継いだ高性能モデル。いよいよホンダの反撃開始か!?

YAMAHA YZF-R1



YAMAHA YZF-R1

JSB1000クラスには、価格高騰を防ぐため、部品の買取制度がある。例えば、大会にて上位3位までに入賞した車両のフロントサスペンションは120万円、リアサスペンションは40万円と決められており、購入希望者がいた場合は拒否できない。

ヤマハのYZF-R1も今シーズンはMotoGP譲りの新技術を入れたニューモデルとなった。ヤマハらしい高いハンドリング性能はそのままに、完全新設計してサーキットでの勝利を目指したという意欲的なモデルだ。

SUZUKI GSX-R1000



SUZUKI GSX-R1000

JSB1000クラスのマシンの最低重量は、2～3気筒/158kg、4～5気筒/168kg、6気筒以上が178kgと決められている。

このスズキのGSX-R1000はすでに2002年からR2-1で大活躍。プロトタイプとしてファクトリーSBマシンを脅かしていたヨシムラ、ケンツのマシンがそれだ。2003年には全8戦中7勝と圧倒的な強さを誇ってチャンピオンのみならず、ランキング2位も獲得。2004年モデルはマイナーチェンジを施し、他メーカーの追撃を真っ向から受けることになる。



KAWASAKI ZX-10R

KAWASAKI ZX-10R

JSB1000のマシンは、原則としてカウル形状(外観)がノーマルと同じでなければならない。シルエットは市販状態に近いわけだが、中身は改造範囲が狭いとも言ってもレーシングマシンだ。

これまで排気量面で最もハンディを負っていたカワサキZX-9Rだったが、2004年満を持して登場したニューモデルZX-10Rは、独創的な構造により600ccマシン並みにスリムなボディにハイパワーエンジンを搭載。市販車のカタログスペックとしてもこのクラス最強のポジションを得た。ライムグリーンと黒を身にまとった伝統の「ニンジャ(愛称)」。レースでも要注目だ。



DUCATI 998R



DUCATI 998R/999R

JSB1000クラスでは、予選・決勝を通じて使用できるタイヤ本数が3セットに制限されている(レインタイヤは規制外)。もちろんこれは過大な競争を防ぎコストを抑えるためだ。

国内4メーカー以外では、イタリアンスポーツの雄DUCATIやAPRILIAも、JSB1000クラスのペースマシンとして公認されている。今シーズンも年間登録チームでは、1チームがDUCATIによる出場を予定している。DUCATIも2004年モデルの登場が予想され、注目を集めるだろう。

それぞれに個性溢れるST600、GP125、GP250

R²-1 MFJ 全日本ロードレース選手権は、メインカテゴリーであるJSB1000クラスの他に、レース専用マシンを使うGP250、GP125、そして一般市販車を使うほぼ無改造のST600クラスがある。

KAWASAKI ZX-6RR



ST600 Class

一般生産型モーターサイクルで、MFJがストックバイク600(ST600)用として公認した車両。改造は保安部品を取り外し、レースに出るための最低限の変更のみ。ローコストを目的に価格高騰を抑えるための買い取り制度(国産車140万円)がある。

排気量401cc~600ccまで(最大4気筒)または、600cc~750ccまで(最大2気筒)の4ストローク車両。

<主な車両>

ホンダCBR600RR・ヤマハYZF-R6・スズキGSX-R600
カワサキZX-6RR、ドゥカティ748R 等

Honda RS125R (R²-1 2003)

GP125 Class

レース専用生産された車両を使用する。

排気量85ccを超え125ccまで(最多気筒数：単気筒)の2ストロークまたは4ストロークの自然吸気エンジンを搭載。マシン単体での最低車重は70kgだが、ライダーの体重による差をなくすために、ライダーが完全装備で乗車した状態での最低重量が132kgと決められている。

<主な車両>

ホンダRS125R、ヤマハTZ125、エンデュランスNER

YAMAHA TZ250 (R²-1 2003)

GP250 Class

レース専用生産された車両を使用する。

排気量175ccを超え250ccまで(最多気筒数：2気筒)の2ストロークまたは4ストロークの自然吸気エンジンを搭載。マシンの最低重量は100kg。GP125、GP250ともに、世界選手権MotoGPに直結するクラスとして根強い人気を誇る。

<主な車両>

ホンダRS250R、ヤマハTZ250、バーニングブラッドRBB

05 | R2-1 Riders.1 R2-1 ライダー.1

シリーズタイトルを狙う年間出場ライダーたち

R2-1 MFJ 全日本ロードレース選手権は、シリーズ7戦(JSB1000 / 7戦・ST600&GP125&250 / 6戦)を戦い、各レースで獲得したポイントを加算、最も獲得ポイントの多い者が年間総合チャンピオンに輝く。また、同時にライダーが所属するチームにも最上位のライダーの獲得したポイントを基準として、チームポイントが加算され、同様にチームランキングを争う。

主に年間総合チャンピオンを争うのは、A.R.T.(Association of Road Racing Teams=ロードレースチーム協会)に登録した年間出場登録チームおよびライダーたちだ。有力なコンストラクターやショップのチームが新しい時代の全日本ロードレース選手権をリードするようになった昨年来、それらのチームに所属するライダーたちが年間で出場して各大会を通じて激しくチャンピオンを争うことになった。

■主な年間出場ライダー.1

*印のライダーはJSB1000とST600にダブルエントリー

 JSB #1/北川圭一	 JSB #2/渡辺篤	 JSB* #3/辻村猛	 JSB #4/井筒仁康	 JSB #5/山口辰也	 JSB #6/中冨伸一
 JSB #8/民辻啓	 JSB #9/江口馨	 JSB #10/大崎誠之	 JSB #11/伊藤真一	 JSB #13/畠山泰昌	 JSB* #15/川瀬裕昌
 JSB #38/原田洋孝	 JSB #46/掛江裕二	 JSB #55/出口修	 JSB #73/小西良輝	 JSB #83/森脇尚護	 JSB #87/柳川明
 JSB #100/徳留和樹	 JSB* #101/鶴田竜二	 ST600 #3/安田毅史	 ST600 #11/清成健一	 ST600 #12/寺本幸司	 ST600 #13/秋田貴志

05 | R²-1 Riders.2 R²-1 ライダー.2

年間出場ライダーの他に各大会でのスポット参戦ライダーも

年間出場ライダーの多くは、前年度選手権の上位ランカーたちで、実力も伯仲。前年度チャンピオンがクラスを転向して新たな挑戦を始めたり、トップの座を守る者と追う者の激しいぶつかり合いなど、見応えはたっぷり。さらに無名ながら成長著しい若手ライダーたちも新たに参入することで、ココ一発の速さや勝負強さでレースが激しく拮抗し面白くなる要因となる。彼らの他にも各大会でスポット参戦(一大会のみの参戦)するチームもあり、ここで紹介する主な年間出場登録チーム所属のライダー以外にも数多くのライダーが参加してくるだろう。

このように、R²-1では実力、実績、話題性の高いライダーから、将来性豊かな若いライダーまで、各レースで激しく火花を散らす。

■主な年間出場ライダー.2

 ST600 #16/八木孝弘	 ST600 #18/生形秀之	 ST600 #23/沼田憲保	 ST600 #39/酒井大作	 ST600 #48/手島雄介	 ST600 #72/宮崎敦
 ST600 #84/嘉陽哲久	 GP125 #2/井手敏男	 GP125 #3/山本武宏	 GP125 #4/菊池寛幸	 GP125 #5/葛原稔永	 GP125 #6/小室旭
 GP125 #7/岡田純一	 GP125 #11/葛原大陽	 GP125 #12/柚木伸介	 GP125 #71/小山知良	 GP125 #101/仲城英幸	 GP250 #3/亀谷長純
 GP250 #4/徳留真紀	 GP250 #6/横江竜司	 GP250 #8/中須賀克行	 GP250 #9/藤岡祐三	 GP250 #55/高橋裕紀	 GP250 #73/青山周平



06 | R2-1 Entry Lists.1 R2-1 主要年間エントリーリスト.1

JSB1000 クラス / 34 台

※★印のライダーは、ST600 クラスとダブルエントリー

No.	Rider	Team	Machine
1	北川 圭一 キタガワ ケイチ	ケンツMOTUL スズキ	SUZUKI
2	渡辺 篤 ワタナベアツシ	ヨシムラ・スズキJOMO with SRIXON	SUZUKI
3	辻村 猛 ツジムラ タケシ★	F.C.C. TSR	HONDA
4	井筒 仁康 イツツ ヒトヤス	チーム桜井ホンダ	HONDA
5	山口 辰也 ヤマガチ タツヤ	ホンダドリームカストロールRT	HONDA
6	中富 伸一 ナカトミ シンイチ	YSP Racing Team sponsored by PRESTO corporation	YAMAHA
8	民辻 啓 タミツジ アキラ	レーシングサブライ・筋斗雲	SUZUKI
9	江口 馨 エグチ ケイ	レーシングチーム ハニービー	HONDA
10	大崎 誠之 オオサキ ノブユキ	SP忠男レーシングチーム	YAMAHA
11	伊藤 真一 イトウ シンイチ	DDBOYS Racing	HONDA
12	東村 伊佐三 ヒガシムラ イサミ	RS-ITOH & KAZE	KAWASAKI
13	島山 泰昌 ハタケヤマ ヤスマサ	クレバーウルレーシング	YAMAHA
15	川瀬 裕昌 カワセ ヒロアキ★	WINS FACTORY	SUZUKI
25	荒川 智樹 アラカワ トモキ	鈴鹿レーシングチーム	HONDA
26	山下 祐 ヤマシタ ユウ	TEAM PLUS ONE	HONDA
30	名倉 嘉一 ナガラ カイチ	浜松エスカルゴ	HONDA
33	本田 晃司 ホンダ コウジ	グリーンクラブ&ウッドストック	KAWASAKI
37	松下 和広 マツシタ カズヒロ	鈴鹿レーシングチーム	HONDA
38	原田 洋孝 ハラダ ヒロタカ	ガレージハラダ	KAWASAKI
39	須貝 義行 スガイ ヨシユキ	PLOT RACING	DUCATI
44	浜口 俊之 ハマグチ トシユキ	DDBOYS Racing	HONDA
46	掛江 裕二 カケエ ユウジ	TEAM STRADA	DUCATI
50	辻本 貴志 ツジモト タカシ	COERCE RACING PROJECT	HONDA
51	清水 秀一 シミズシュウイチ	GAR FIELD RSK	SUZUKI
55	出口 修 デグチ オサム	DyDO MIU Racing Team	HONDA
62	岸本 直樹 キシモト ナオキ	ドッグファイトレーシング	YAMAHA
73	小西 良輝 コニシ ヨシテル	Team・HARC-PRO.	HONDA
77	金山 和弘 カナヤマ カズヒロ	Team橋本組	SUZUKI
83	森脇 尚護 モリワキ ショウゴ	Team高武RSC	HONDA
87	柳川 明 ヤナガワ アキラ	TEAM GREEN	KAWASAKI
88	鈴木 徹 スズキ トオル	GMD コンピュートラック・レーシング・チーム	SUZUKI
96	喜久川 光 キクガワ ヒカル	グリーンクラブ&ウッドストック	KAWASAKI
100	徳留 和樹 トクドメ カズキ	Team高武RSC	HONDA
101	鶴田 竜二 ツルタ リュウジ★	トリックスターレーシング	KAWASAKI

※2004年3月22日現在 A.R.T.年間出場登録チームの資料を元に、年間出場ライダーを掲載

※チーム名称は、A.R.T.登録のもので、実際のエントリー名と一部異なることもあります。

※この他に、各サーキットでのスポット参戦ライダーがエントリーします。また、リストの内容は変更される場合があります。



06

R2-1 Entry Lists.4

R2-1 主要年間エントリーリスト.2

ST600クラス(45台)

※★印のライダーは、JSB1000クラスとダブルエントリー

No.	Rider	Team	Machine
2	辻村 猛 ツジムラ タケシ★	F.C.C. TSR	HONDA
3	安田 毅史 ヤスタ タケシ	Team・HARC-PRO.	HONDA
5	長谷川 克憲 ハセガワ カツノリ	TEAM RC SUGO	YAMAHA
7	鶴田 竜二 ツルタ リュウジ★	トリックスターレーシング	KAWASAKI
8	高橋 英倫 タカハシ ヒデミチ	TEAM RC SUGO	YAMAHA
9	和泉 美智夫 イズミ ミチオ	Jレーシング	YAMAHA
11	清成 健一 キヨナリ ケンイチ	チーム桜井ホンダ	HONDA
12	寺本 幸司 テラモト コウジ	VEGA SPORTS	SUZUKI
13	秋田 貴志 アキタ タカシ	ウイング ヨシイRC	HONDA
14	今野 由寛 コンノ ヨシヒロ	レーシングサプライ・角力斗雲	SUZUKI
15	山本 琢磨 ヤマモト タクマ	レーシングチーム ハニービー	HONDA
16	八木 孝弘 ヤギ タカヒロ	伊藤RACING・GMDスズカ	YAMAHA
18	生形 秀之 オガタ ヒデユキ	MAX-SPEED	HONDA
22	奥田 貴哉 オクダ タカヤ	HITMAN RC 甲子園ヤマハ	YAMAHA
23	沼田 憲保 ヌマタ ノリヤス	伊藤RACING・GMDスズカ	YAMAHA
31	武山 祐介 タケヤマ ユウスケ	RACING TEAM 森のくまさん	YAMAHA
32	橋本 充巧 ハシモト アツヨシ	Jhaレーシング	HONDA
33	加藤 直樹 カトウ ナオキ	Team Speed of Japan	HONDA
36	浜口 喜博 ハマグチ ヨシヒロ	チームヨシハル	HONDA
37	浅川 邦夫 アサカワ クニオ	アサカワスピード	SUZUKI
38	森井 威綱 モリイ タケツナ	赤い3輪車レーシングクラブ	HONDA
39	酒井 大作 サカイ ダイサク	TEAM GREEN	KAWASAKI
44	内川 正三 ウチカワ ショウゾウ	RS-ITOH & KAZE	KAWASAKI
45	荻田 庄平 カリタ ショウヘイ	RS-ITOH & KAZE	KAWASAKI
48	手島 雄介 テジマ ユウスケ	SP忠男レーシングチーム	YAMAHA
50	川瀬 裕昌 カワセ ヒロアキ★	WINS FACTORY	SUZUKI
51	吉田 忠幸 ヨシダ タダユキ	WINS FACTORY	SUZUKI
52	古川 力也 フルカワ リキヤ	MORIWAKI CLUB	HONDA
53	津田 拓也 ツダ タクヤ	TSR	HONDA
54	小川 健 オガワ ケン	ウイング ヨシイRC	HONDA
55	的場 浩晃 マトバ ヒロアキ	TSR	HONDA
56	野崎 俊宏 ノザキ トシヒロ	ウイング ヨシイRC	HONDA
57	石川 朋之 イシカワ トモユキ	VEGA SPORTS	SUZUKI
64	湧田 芳也 ワクダ ヨシナリ	Team BATTLE	HONDA
69	泉本 真宏 イズミ マサヒロ	SPEED SHOP FUSE	YAMAHA
71	浜辺 太地 ハマベ タイチ	昭和電機レーシングチーム	HONDA
72	宮崎 敦 ミヤザキ オサム	DAYTONA	YAMAHA
74	戸田 正 トダ タダシ	パーニングブラッドRT	HONDA
76	岩崎 雄亮 イワサキ ユウスケ	チームヨシハル	HONDA
81	三瓶 陽介 ミカメ ヨウスケ	レーシングチーム ハニービー	HONDA
84	嘉陽 哲久 カヨウ テツキユウ	HITMAN RC 甲子園ヤマハ	YAMAHA
90	奥野 正雄 オクノ マサオ	Team SURF JAJA	SUZUKI
96	岡田 洋一 オガタ ヨウイチ	グリーンクラブ&ウッドストック	KAWASAKI
97	寺田 健太 テラダ ケンタ	赤い3輪車レーシングクラブ	HONDA
156	鈴木 大五郎 スズキ ダイゴロウ	レーシングサプライ・筋斗雲	SUZUKI

※2004年3月22日現在 A.R.T.年間出場登録チームの資料を元に、年間出場ライダーを掲載

※チーム名称は、A.R.T.登録のもので、実際のエントリー名と一部異なることもあります。

※この他に、各サーキットでのスポット参戦ライダーがエントリーします。また、リストの内容は変更される場合があります。



06

R2-1 Entry Lists.3

R2-1 主要年間エントリーリスト.3

GP125クラス(39台)

No.	Rider	Team	Machine
2	井手 敏男 イテ トシオ	Feel & テック・2レーシング	YAMAHA
3	山本 武宏 ヤマモト タケヒロ	チーム テック・2 & Feel	YAMAHA
4	菊池 寛幸 キクチ ヒロユキ	チーム ウィリー	HONDA
5	葛原 稔永 クズハラ トシヒサ	HONDA熊本レーシング	HONDA
6	小室 旭 コムロ アキラ	S-way	HONDA
7	岡田 純一 オカダ ジュンイチ	CLUB PLUS ONE	HONDA
8	SUHATHAI CHAEMSAP スハタイ チャンサップ	THAI HONDA CASTROL with ERP	HONDA
9	菅谷 慎一 スガヤ シンイチ	TEAM PLUS ONE	HONDA
11	葛原 大陽 クズハラ ヒロアキ	浜松エスカルゴ	HONDA
12	柚木 伸介 ユノキ ノブユキ	鈴鹿レーシングチーム	HONDA
13	須磨 貞仁 スマ サダヒト	Team Life	HONDA
14	波多野 祐樹 ハタノ ユウキ	18 GARAGE RACING TEAM	HONDA
17	内田 剛 ウチダ ゴウ	TEAM KAZUMA	HONDA
18	今井 克彦 イマイ カツヒコ	ENDURANCE	HONDA
19	中村 貴紀 ナカムラ タカノリ	Team Life	HONDA
20	濱本 裕基 ハマモト ユウキ	Team Life	HONDA
23	岩田 裕臣 イワタ ヒロオミ	TEAM PLUS ONE	HONDA
26	則包 茂樹 ノリカネ シゲキ	Feel & テック・2レーシング	YAMAHA
30	東 幸寛 アヅマ ユキヒロ	ホワイトレーシング	HONDA
31	船田 勝則 フナダ カツノリ	TEAM GENIUS	HONDA
36	竹内 吉弘 タケウチ ヨシヒロ	RP馬行&YUE	HONDA
37	長谷川 稔 ハセガワ ミノル	ホワイトレーシング	HONDA
38	高橋 透 タカハシ トオル	ソルティードッグ☆Mチューン	HONDA
39	山田 亮太 ヤマダ リョウタ	CLUB PLUS ONE	HONDA
46	大谷 和也 オオタニ カズヤ	チーム テック・2 & Feel	YAMAHA
51	豫風 直人 ヨフウ ナオト	昭和電機レーシングチーム	HONDA
54	浪平 伊織 ナミヒラ イオリ	伊藤RACING・GMDスズカ	YAMAHA
55	古市 右京 フルイチ ウキョウ	Jhaレーシング	HONDA
56	柳沢 祐一 ヤナギサワ ユウイチ	18 GARAGE RACING TEAM	HONDA
62	花房 一樹 ハナフサ カズキ	CLUB Y' S	HONDA
64	井上 誠 イノウエ マコト	Team BATTLE	HONDA
70	赤間 清 アカマ キヨシ	CLUB HARC-PRO.	HONDA
71	小山 知良 コヤマ トモヨシ	SP忠男レーシングチーム	YAMAHA
72	森 新 モリ アラタ	CLUB HARC-PRO.	HONDA
73	高橋 巧 タカハシ タクミ	CLUB HARC-PRO.	HONDA
101	仲城 英幸 ナカジョウ ヒデユキ	Jhaレーシング	HONDA
111	大西 克尚 オオニシ カツヒサ	Feel & テック・2レーシング	YAMAHA
189	埜田 健太郎 ノダ ケンタロウ	チーム ウィリー	HONDA
802	山内 隆史 ヤマウチ タカシ	ロイヤルパープル&kikiレーシング	HONDA

※2004年3月22日現在 A.R.T.年間出場登録チームの資料を元に、年間出場ライダーを掲載。

※チーム名称は、A.R.T.登録のもので、実際のエントリー名と一部異なることもあります。

※この他に、各サーキットでのスポット参戦ライダーがエントリーします。また、リストの内容は変更される場合があります。



06

R2-1 Entry Lists.2

R2-1 主要年間エントリーリスト.4

GP250クラス(27台)

No.	Rider	Team	Machine
3	亀谷 長純 カメヤ チョウジュン	バーニングブラッドRT	HONDA
4	徳留 真紀 トクドメ マサキ	Jレーシング	YAMAHA
6	横江 竜司 ヨコエ リュウジ	RACING TEAM森のくまさん	YAMAHA
8	中須賀 克行 ナカスガ カツユキ	SP忠男レーシングチーム	YAMAHA
9	藤岡 祐三 フジオカ ユウゾウ	ENDURANCE	HONDA
10	及川 誠人 オイカワ セイジン	プラスミューレーシングチーム	YAMAHA
12	東浦 正周 ヒガシウラ マサチカ	プラスミューレーシングチーム	YAMAHA
14	田村 則夫 タムラ ノリオ	TEAM ツツミモータース	YAMAHA
15	及川 玲 オイカワ アキラ	ペンタグラム	YAMAHA
17	小島 淳 コジマ アツシ	TEAM PLUS ONE	YAMAHA
18	山口 智也 ヤマグチ トモヤ	チームモトスペース	YAMAHA
23	野寄 真二 ノヨリ シンジ	浜松エスカルゴ	HONDA
24	石井 春希 イシイ ハルキ	TEAM PRO-TEC	YAMAHA
25	櫻井 大幸 サクライ アキト	バーニングブラッドRT	HONDA
26	秋谷 守 アキヤ マモル	チームモトスペース	YAMAHA
27	前田 岳 マエダ ガク	nontanZu	YAMAHA
32	藤田 浩司 フジタ ヒロシ	プラスミューレーシングチーム	YAMAHA
41	石川 大助 イシカワ ダイスケ	TEAM PRO-TEC	YAMAHA
44	雨宮 浩二 アメミヤ コウジ	TEAM YDS	YAMAHA
51	福山 京太 フクヤマ キョウタ	T.モトキッズ	YAMAHA
55	高橋 裕紀 タカハシ ユウキ	DyDO MIU Racing Team・iF	HONDA
72	長谷川 剛	チームヨシハル	HONDA
73	青山 周平 アオヤマ シュウヘイ	Team・HARC-PRO.	HONDA
79	磯谷 晋一 イソヤ シンイチ	T-PROJECT	YAMAHA
84	佐藤 裕児 サトウ ユウジ	HITMAN RC 甲子園ヤマハ	YAMAHA
99	末続 仁厚 スエツグキミアツ	CLUB KENJIN & D	YAMAHA
111	松井 剛 マツイ タケシ	チーム テック・2 & Feel	YAMAHA

※2004年3月22日現在 A.R.T.年間出場登録チームの資料を元に、年間出場ライダーを掲載。

※チーム名称は、A.R.T.登録のもので、実際のエントリー名と一部異なることもあります。

※この他に、各サーキットでのスポット参戦ライダーがエントリーします。また、リストの内容は変更される場合があります。

07 | R2-1 Spectators 2003年観客動員数

2003年 R2-1 MFJ 全日本ロードレース選手権

2003年のR2-1 MFJ 全日本ロードレース選手権は、最高峰クラスがJSB1000クラスと位置付けられ、それにSBおよびS-NK車両が混走する形=JSB1000(SB/S-NK混走)となった。2004年はこれがJSB1000へと完全に一本化される。

シリーズ開幕戦の鈴鹿2&4レースはJSB1000(SB/S-NK混走)クラスのみ、続く第2戦はスーパーバイク世界選手権(SBK)との併催でST600クラスのみが開催され、これらのクラスは全7戦、GP125とGP250クラスは全6戦が開催された。



2003年の4クラスチャンピオンが勢揃い。左から北川圭一(JSB1000)、青山博一(GP250)、小西良輝(ST600)、青山周平(GP125)

■ 2003年R2-1全日本ロードレース選手権／観客動員実績

開催日	大会	天候	開催地・大会名称	動員数(人)
3月23日	全日本ロード第1戦	曇/晴	鈴鹿2&4レース	27,000
4月27日	全日本ロード第2戦	晴	スポーツランドSUGO(SBK併催)	44,500
5月11日	全日本ロード第3戦	晴	筑波スーパーバイクレース	16,800
5月25日	全日本ロード第4戦	曇	鈴鹿スーパーバイク200km	19,000
7月20日	全日本ロード第5戦	雨/曇	もてぎスーパーバイクレース	11,000
8月24日	全日本ロード第6戦	晴	オートポリス スーパーバイクレース	29,800
9月14日	全日本ロード第7戦	晴	SUGO スーパーバイクレース	11,000
10月19日	全日本ロード第8戦	晴	TIスーパーバイクレース	29,600

★観客動員総数：188,700人

★1大会平均観客動員数：23,588人

■ 2003年R2-1全日本ロードレース選手権／参加台数実績(台)

大会	エントリー総台数	JSB1000	ST600	GP250	GP125
全日本ロード第1戦	62	62	-	-	-
全日本ロード第2戦	65	-	65	-	-
全日本ロード第3戦	199	40	60	42	57
全日本ロード第4戦	245	79	74	37	55
全日本ロード第5戦	187	32	54	45	56
全日本ロード第6戦	155	32	49	33	41
全日本ロード第7戦	202	45	51	40	66
全日本ロード第8戦	202	51	61	38	52
小計(平均)	1,317(165)	341(49)	414(59)	235(39)	327(55)

※日付は決勝日

※第1戦は、全日本選手権フォーミュラ・ニッポンと併催で、JSB1000(SB/S-NK混走)クラスのみ、第2戦はスーパーバイク世界選手権との併催でST600クラスのみ開催



08 | Activities of R2-1 Promotions .1 R2-1 プロモーション.1

JSB1000を中心に、地域プロモーション、CS放送などを展開

R2-1 MFJ 全日本ロードレース選手権は、メインイベントであるレース=バトルそのものが壮大なエンターテインメント。市販車あるいはレース専用車をベースに、速さを追及するための独自の技術を注ぎチューニングを施して個性的なマシンを創造するチーム、そして華麗なテクニックを駆使して最先端マシンを操るライダーたちこそが、最大の魅力。全国3エリア、6箇所のサーキットを転戦して行なわれるシリーズ自体が、すでにファンやユーザーに対する一つの大きなコミュニケーションメディアと言える。

その意味では、サーキットでバトルを直接=ライブで体感してもらうことが、最も強くその魅力をアピールする方法であると考えている。2004年は新しい時代の最高峰カテゴリーであるJSB1000を中心に、レース・サーキット自体をコミュニケーションメディアとすることはもちろん、地域プロモーション活動を行なってサーキットのある地域独自のプロモーション方法を展開していく予定だ。



2004年全日本ロードレース選手権プロモーション

●TV放映～CS放送と地上波をミックス。さらにインターネットでの動画配信も

CS放送(原則として全戦放映)と地上波(ダイジェスト版)のTV放映およびMFJ公式ホームページにおける動画配信も継続して実施。

●地域プロモーション活動の強化

各開催地域別のプロモーション活動を継続して実施。各サーキット毎に地域色を強く打ち出したプロモーション活動を行い来場を促進する。地域プロモーションの要となるMFJネットワークショップ(旧スポーツ協力店)を組織し、各ショップを通じてユーザーに対し広く情報を提供していく。

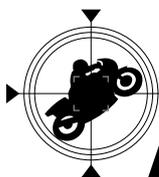
08 | Activities of R2-1 Promotions .2 R2-1 プロモーション.2

CS放送でシリーズ全戦他(毎週月曜日)を放映

2004年のR2-1 MFJ 全日本ロードレース選手権は、下記内容で放映を予定。

①CS放送は、CSスポーツチャンネル「GAORA sports」(SKY PerfecTV!/Ch.302およびSKY PerfecTV!2/Ch.254、または地域のCATV局)にて、番組名「ロックオン」として放送予定。全日本ロードレース選手権は全戦カバーされる他、トライアル、モトクロス、スノーモビルなどの全日本選手権も全戦放映予定。放映は、毎週月曜日22:30～23:00とリピート2回の週3回。
また同じ放映予定にて、「ロックオンR」の番組名でMotoGPを全戦放映する他、新型車のインプレッションやイベント紹介なども行ないます。

新番組



MFJ 全日本バイクレース

ロックオン

ロードレース編キャスター

上田 昇(元GPライダー)

モトクロス編キャスター

榎本正則(元ワークスライダー)

トライアル編キャスター

山本昌也(元全日本選手権5連覇チャンピオン)

初回放送 月曜日22:30～23:00 / 再放送 2回

番組に関するお問い合わせは

GAORA視聴者センター TEL 0570-000-302

または TEL06-6948-0066 (平日10:00～18:00)

■全日本バイクレースロックオン2004 / 放映予定

放映日	内容
3月1日	全日本チーム取材(1)
3月8日	全日本チーム取材(2)
4月5日	全日本ロードレース#1 第1戦鈴鹿2 & 4
5月3日	全日本ロードレース#2 第2戦オートポリス
5月31日	全日本ロードレース#3 第3戦筑波
6月21日	全日本ロードレース#4 第4戦もてぎ
8月23日	全日本ロードレース#5 鈴鹿8時間耐久
9月20日	全日本ロードレース#6 第5戦SUGO
10月4日	全日本ロードレース#7 第6戦鈴鹿
11月8日	全日本ロードレース#8 第7戦TI
12月13日	全日本総集編

※全日本ロードレース選手権関連分のみ。その他の詳細スケジュールは、MFJ公式サイト(www.mfj.or.jp)にてお確かめください。

08 | Activities of R2-1 Promotions .3 R2-1 プロモーション.3

ブロードバンドMFJ全日本選手権動画サービス、今年も実施!

MFJでは、「ブロードバンドMFJ(BBMFJ)」のサービスを今年も実施する。

BBMFJとは、全日本ロードレースやモトクロス、トライアルのダイジェスト映像を、インターネットを通じてストリーミング形式(56k/500k)にてご覧いただけるサービスでのこと。視聴いただくためにはISDN以上の通信環境が必要となるが、通信料金以外に視聴費用は掛からない。

MFJ Online Magazine(<http://www.mfj.or.jp>)トップページから、BBMFJ専用ページにアクセスして視聴することが可能。2003年は全14回にわたって実施した。

URL <http://www.mfj.or.jp/>



MFJ Online Magazine～BBMFJ専用ページ

●視聴に必要な機器●

* Windows media playerがインストールされていることが必要です。

* Windowsの場合

500MHz以上のIntel Pentium III プロセッサー(または同等品)、64MB RAM(128MB以上推薦)、65,000色以上のビデオディスプレイカード、16ビットサウンドカードとスピーカー
Windows98、WindowsNT/2000、Windows ME、WindowsXP(XPの場合、256MB以上のRAMを推薦)のいずれか
WindowsCEを搭載した、一部のセットボックスでもご覧になれる場合があります。

* Macの場合

PowerPC G3 プロセッサー(333MHz以上)、Mac OS 8.1以降、64MB RAM(128MB以上推薦)
HDD30MB以上の空き容量

08

Activities of R²-1 Promotions .4

R²-1 プロモーション.4

MFJ ネットワークショップで地域プロモーションを積極展開

日本モーターサイクルスポーツ協会(MFJ)では、モーターサイクルスポーツの普及・振興を進めるにあたり、地域ごとに販売店と競技施設(サーキット)並びに地域支部を結び付け、「モーターサイクルスポーツ」＝「バイクの楽しみ方」をキーワードとした普及活動をオートバイに携わる業界の方々と手を取り合って進めていきたいと考えている。そのために既存のMFJスポーツ協力店の結び付きを強化し、モーターサイクルを使った遊びのソフトの各種情報を提供するとともに、ユーザーサービスとして利用いただける各種特典をご用意させていただき新しい企画が「MFJ ネットワークショップ」である。

2004年R²-1 MFJ 全日本ロードレース選手権では、各施設が独自にプロモーションを企画し、その中で「MFJ ネットワークショップ」と共にユーザーにアピールできる下記のような様々な特典(例)を企画中。

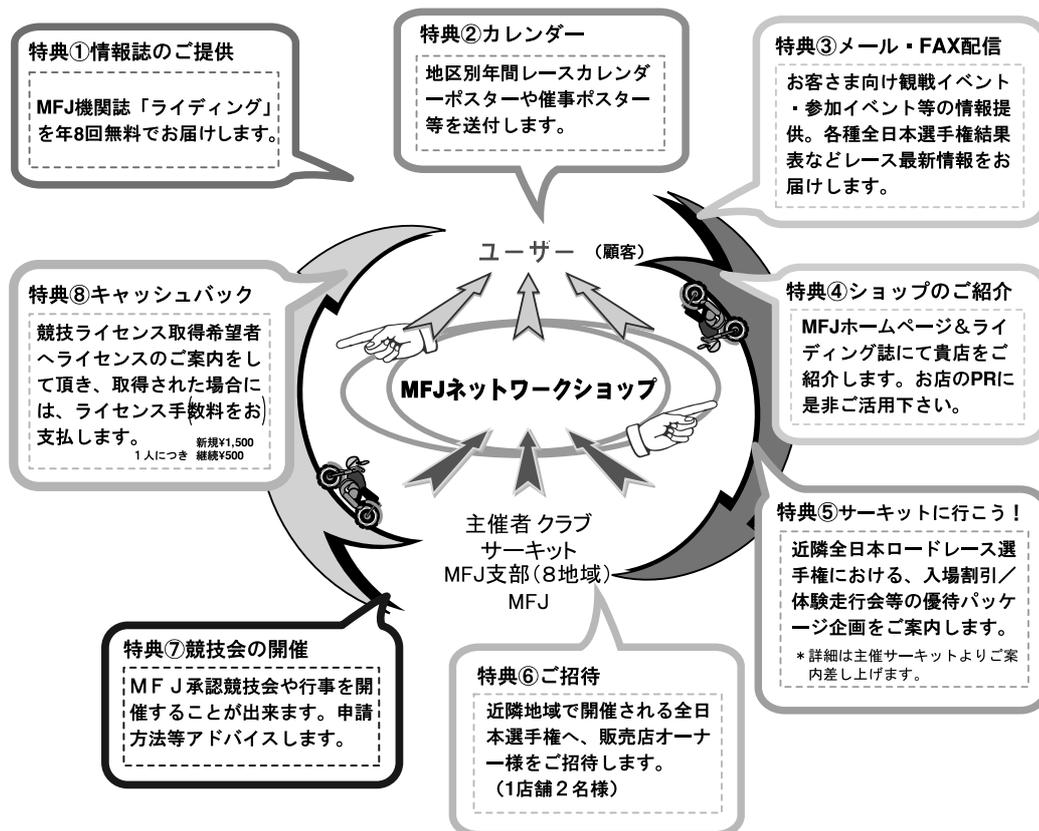
- 各種観戦券・パドックパス・ピットウォークなどの特別割引
- バイクでの来場者駐車料無料
- 優先観戦席の確保
- イベント実施スペースの確保
- 施設利用料割引
- フリーペーパーの制作
- 会場でのネットワークショップ顧客サービス
- ツーリングイベントの実施
- サーキット走行の割引
- 地域メディアを最大限活用したメディアミックスプロモーション 等

MFJ ネットワークショップ

MFJ Network Shopに加盟して、
モーターサイクルファンのネットワークを広げよう!!

MFJネットワークショップとは、MFJやサーキットから発信される各種競技会、イベント企画等の告知、レース結果報告などのあらゆる情報をモーターサイクル愛好者にご提供(ご伝達)頂いたり、MFJライセンス取扱いショップとしてお店に来て頂くお客さまやお友達に、モーターサイクルスポーツ＝オートバイの楽しみ方をご紹介して頂く、コミュニティー窓口として役割を担うショップです。

●ご加盟頂いた販売店様には下記の特典をご用意しております。●



08 | Activities of R2-1 Promotions .5 R2-1 プロモーション.5

MFJ Online Magazine / R2-1 総合サイト

R2-1の公式レース情報は、MFJの公式ホームページ「MFJ Online Magazine」に掲載されている。

■MFJ Online Magazineに掲載されるR2-1の公式レース情報

各戦レース結果速報・予選/決勝レポート・ポイントランキング・観戦情報・チーム情報・動画配信 等
<http://www.mfj.or.jp/>

また、「R2-1 Official Web Site (<http://www.r2-1.com/>)」はR2-1の総合サイトとして観戦に役立つガイドや公式FC「CLUB R2-1」のサイトとして、ファンのための情報や「MFJ Online Magazine」では紹介しきれない各種最新情報などを掲載する形で運営される。こちらも要チェック!!



MFJ公式ホームページ [MFJ Online Magazine]



R2-1 総合サイト [R2-1 Official Web Site]

予選速報号～R2-1 EXPRESS

R2-1 シリーズ全戦を通じて発行している予選速報号が、「R2-1 EXPRESS」。その名の通り、土曜日に行なわれた予選の速報レポートやその結果、観戦に役立つグリッド表などを満載。日曜日の早朝から来場者に配布、公式プログラムなどに挟み込みなどの方法で発行している。

<体裁>

モノクロ・A4×4P

発行部数：各大会約5,000部



08 | Activities of R2-1 Promotions .6 R2-1 プロモーション.6

CLUB R2-1 ~ R2-1 オフィシャルファンクラブ

R2-1 唯一のオフィシャルファンクラブがCLUB R2-1。シリーズ全戦を通じて各種特典が受けられる他、鈴鹿8耐などの世界選手権でも特典のある下記の会員種別がある。



All Japan Road Race Championship

CLUB R2-1

R2-1 観戦のためのオフィシャルファンクラブ

2004年CLUB R2-1 入会受付中!!

新型マシンが出揃う最高峰クラスJSB1000を筆頭として、GP250、GP125、ST600と4つの個性的なクラスで、シリーズの頂点を目指してバトルが繰り広げられる2004年MFJ R2-1全日本ロードレース選手権シリーズ。

唯一のオフィシャルファンクラブ、CLUB R2-1では、R2-1観戦に役立つ特典を満載して只今入会受付中!! この機会に是非ご入会ください。

シーズン開幕前に入会すると、CLUB R2-1の特典が一杯お使いいただけます!!

2004 CLUB R2-1 SUPPORTERS

サポーターズ会員・年会費 **新会費 3,500円**

特典

2004年R2-1シリーズ全戦で当日観戦料が大幅割引、パドックパス10%off、ピットウォークが無料! 他

2004 CLUB R2-1 PLATINUM

プラチナ会員・年会費 **25,000円**

特典

2004年R2-1シリーズ全戦でパドックエリアまで入場可能なプラチナカードを発行。もちろんピットウォークも無料! 他

★両会員の共通特典として、シーズン終了後に開催されるMFJランキング認定表彰式に限定ご招待の他、世界選手権日本大会(MotoGP、鈴鹿8耐)の前売り観戦券、パドックパス等の割引販売もあります!! 詳しくは裏面をご覧ください。

※CLUB R2-1会員の有効期限は、入会年の12月末日までとなります。

※2004年R2-1全日本ロードレース選手権シリーズ第1戦鈴鹿2&4レースは、JSB1000クラスのみがフォーミュラ・ニッポンとの同日開催となりますが、特典は通常通りご利用いただけます。

※5/29・30開催の"Road to 8hours 鈴鹿300kmロードレース" (昨年までの鈴鹿200km)については、CLUB R2-1の特典を一部ご利用いただけるよう(予定)に調整中です。



All Japan Road Race Championship

CLUB R2-1

[CLUB R2-1]は、R2-1全日本ロードレース選手権を盛り上げるための唯一の公式ファンクラブ。"関わる者すべてがサポーター"を合言葉に、ロードレースファンの皆さん一人ひとりがレースを盛り上げていこうとするものです。

R2-1全日本ロードレース選手権の観戦に役立つ各種特典の他、MotoGP世界選手権、鈴鹿8時間耐久ロードレースの世界選手権日本大会各レースでも特典が使用可能。

R2-1全日本ロードレースを観戦するなら、是非「CLUB R2-1」にご入会ください。あなたの力がロードレースを盛り上げる力になります。

MFJ



なお、「R2-1 Official Web Site」において、CLUB R2-1の入会が可能となっている。

[R2-1 Official Web Site]

<http://www.r2-1.com/>

●お問い合わせは

Club R2-1 事務局

名古屋市西区栄生1-26-29 〒451-0052 (アバンテック ジャパン,INC.内)

☎.052-565-0501 FAX.052-565-0502 [E-mail] fanclub@r2-1.com



Contacts us

ご連絡先

■この件に関するお問い合わせは

(財)日本モーターサイクルスポーツ協会(MFJ)

MFJプロモーション委員会事務局

〒104-0045 東京都中央区築地2丁目11-24 第29興和ビル別館7F

TEL.03-5565-0900 FAX.03-5565-0907 公式サイト <http://www.mfj.or.jp/>